

「相摸国天平七年封戸租交易帳」 の復原と二三の考察

The Restoration and Studies of "the Books of Trading
Fuko-so in *Sagami* Province" for the 7th Year of *Tempyō*

荒井秀規

はじめに

- ① 虎尾俊哉氏の復原
- ② 『神奈川県史』の復原
- ③ 「相摸国印」の位置からの復原
- ④ 全給不明給主の推定
- ⑤ 半給不明給主の推定

おわりに

【論文要旨】

天平7年(735)年「相摸国封戸租交易帳」を扱った研究は多く、欠佚部の復原についても、幾つかの考察がある。

しかし、従来の復原は、「交易帳」残存部の数値の加減乗除から欠佚部を「虫食い算」で求めるにとどまり、そこに押印されている「相摸国印」や料紙の問題を考察に用いてはいない。

「交易帳」の写真版や料紙に関する詳細なデータが公開された今日、国印の位置や料紙の寸法、料紙に残る書き直し痕などに注目する必要がある。そのことによって、従来の復原案を確認、あるいは訂正するとともに、新たな復原を提示することができ、その中で不明であった封戸主を推定することも可能である。

また、書き直し痕を分析することにより、この「交易帳」の作成段階をめぐる、国衙レベルか郡・郷レベルかの議論は、前者が妥当であると確定される。「交易帳」に見る数値は、国衙の調整操作による結果であり、「交易帳」の数値から郡の自律性を過大に評価することはできない。むしろ、国衙レベルによる封戸の管理に着目すべきものとなる。

はじめに

天平7(735)年「相模国封戸租交易帳」⁽¹⁾(原文書は継目裏書に「相模国天平七年封戸租交易帳」とある。以下「交易帳」と略す)を扱った研究は多く、欠佚部の復原についても、戦前の西村正男⁽²⁾氏の論を早いものとして、多くの考察がある。中でも、虎尾俊哉氏の研究が「交易帳」を正面から扱った専論で、以後の復原案の基本となっている。

しかし、虎尾氏が作成した復原表は、その論考の目的からして欠佚部の封主不明部の内訳に及んでおらず、また単純な誤植⁽⁴⁾があって、そのままでは使用できない点が惜しまれる。虎尾案と前後しては菊地康明氏の復原⁽⁴⁾があり、その後では『相模原市史』(岡本勇氏⁽⁵⁾)や野々村安浩氏⁽⁶⁾が虎尾氏の復原を補うとともに別の復原案を提示している。一方、不明封主の推定については、『神奈川県史』(竹内理三氏⁽⁷⁾)や中西康裕氏⁽⁸⁾の案があり、また近時、浅野充氏⁽⁹⁾が一部新たな復原の可能性と不明給主の推定案を提示している。

ところが、右諸氏をはじめ従来の復原は、「交易帳」残存部の数値の加減乗除という言わば「虫食い算」で欠佚部を復原するにとどまり、そこに押印されている「相模国印」や料紙の問題を考察に用いてはいない。筆者も以前に⁽¹⁰⁾、「交易帳」に関して史料紹介と復原を試みたことがある。しかし、意に尽くせなかった点があり、またその際には料紙の問題を検討に加えなかった。そこで、本稿では、「相模国印」の位置や料紙の幅に着目しながら、再度「交易帳」の復原を試みることにしたい。

はじめに、『正倉院古文書影印集成』⁽¹¹⁾によって、現在A～E 5つの断簡として伝わる「交易帳」のデーターを掲げておく。【表1】

①……………虎尾俊哉氏の復原

まず、基本となる虎尾俊哉氏の復原を確認したい。虎尾氏は、その復原に当たって、『大日本古文書』の誤植の指摘とともに⁽¹²⁾、次の重要な指摘をしている。

I 段別1束5把の租法において、田租額が把より下の単位に及ばないように、見輸租田積の歩の数値は1把の租を賦課される24歩の倍数に設定されている。

この結果、残存部の見輸租田積の歩の数値は、0(360)、48、96、120、144、216、240、288とすべて24歩の倍数に限られている。

II 官と給主とで折半する半給封戸の場合に、単に歩の数値を24の倍数としたのでは、たとえば、2段120歩の租稲3束5把を分けるとした場合のように、二分の一把という端数が出るおそれがある。これを避けるために、半給の見輸租田積そのものは48歩の倍数に設定されている。

この結果、半給の見輸租田積は、段数が偶数ならば歩数は24歩の偶数倍、段数が奇数ならば歩数は24歩の奇数倍となっている。

虎尾氏は右を前提として、「交易帳」の欠佚部の復原を試み、特にE断簡に記載がある大官寺(大安寺)の封戸(以下、原史料の「食封」を便宜的「封戸」とすることがある。)

大官寺食封 高座郡壹伯戸 田參伯肆拾伍町玖段參伯壹歩 不輸租田貳伯貳拾肆町壹伯〔 〕
の不輸租田積「二二四町〇段一□□歩」について、二つの復原案を提示した。虎尾説に沿って復原すれば、次となる。

- ① 「一□□歩」は、100歩から99歩までの間である。
- ② ①応じて、見輸租田は、121町9段201歩から102歩の間となる。
- ③ 見輸租田の歩数はⅠのように24歩の倍数であるから、②は192歩、168歩、144歩、120歩のいずれかに限られる。
- ④ この大官寺の封戸は半給であろうから、Ⅱにより、9段という奇数段に続く歩数は、③よりさらに絞られて、24歩の奇数倍の(イ)168歩と(ロ)120歩のいずれかとなる。
- ⑤ ④に③に応じて不輸租田が決まるが、そのどちらかには確定されない。

よって、次の二つの復原案が考えられることになる(以下、論旨に支障がない限り小字を用いる)。

(イ) 不輸租田二二四町一三三歩 見輸租田一二一町九段一六八歩

租一八二九束二把〈納官九一四束六把・給主九一四束六把〉

(ロ) 不輸租田二二四町一八一歩 見輸租田一二一町九段一二〇歩

租一八二九束〈納官九一四束五把・給主九一四束五把〉

いずれかに断定され得ないのが残念なところであるが、この虎尾説は、以後の「交易帳」を扱う諸研究の拠り所となった。しかし、その復原表が、従三位鈴鹿王(C断簡)と従四位下檜前女王(D断簡)の間の欠佚部に半給給主2所分の封戸の記載を想定した点は継承されず、近時の浅野氏を除けば、その欠佚部には内訳の一部が残存する個人1人分(本稿の某人丙)の封戸を想定し、大官寺(D断簡)と末尾部(E断簡)の間の欠佚部に寺院(本稿の某寺ないし某人丁)の封戸を想定する野々村氏や『神奈川県史』の復原案を採るのが専らのようなのである。

②……………『神奈川県史』の復原

虎尾説以降に、「交易帳」の復原を正面から試みたものとして、竹内理三氏が担当した『神奈川県史』(以下『県史』)がある。その特色は、第1に資料編で「交易帳」を原寸大・原色版で付録にしたこと、第2に「交易帳」の復原を詳論し、あわせ欠佚部の給主名の推定を行ったことである。⁽¹⁴⁾「交易帳」を原寸・原色で広く紹介したことは極めて有用なものがあつた。しかし、残念ながらその復原は、虎尾説にまったくふれず、さらに加減乗除による復原作業の初期段階で計算ミスがあつて以降の復原数値がその計算ミスに引きずられて算出されている連鎖的な誤りがある。また、付録では印面と糊痕の変色部とが同一色に印刷されてしまっている難点があつた。

そして、本稿が先ず問題とするA、B断簡の間の全給封戸主記載の欠佚部を『県史』は、次のような方法で復原し、この点は『相模原市史』や野々村氏、中西氏⁽¹⁵⁾の復原案も同様であるが、『県史』・市史には計算ミスがあり、復原数値は正しくない。

それは、初めに、某人乙の前に、全給封戸主4人のうちから名前の判明している皇后宮(原史料には「皇后官」とある。光明皇后)、舎人親王、某人乙の3人の封戸を除いた200戸を某人甲の封戸と想定する。次に、その田数などの内訳を、「交易帳」首部の国内総記に載る全給4所の合計田額

2182町2段117歩から判明している皇后宮100戸と舍人親王300戸、および某人乙100戸の額を差し引いて算出する。⁽¹⁷⁾この方法だと、某人甲・乙の封戸の内容はそれぞれ、

(あ) 某人甲食封 二〇〇戸 田六一八町一段三四一步 不輸租田一一五町八段二四五歩
見輸租田五〇二町三段九六歩 租七五三四束九把

(い) 某人乙食封 一〇〇戸 田三七五町二段二六三步 不輸租田九八町四段二六三步
(鎌倉郡) 見輸租田二七六町八段 租四一五二束

尺度郷五〇戸……

荏草郷五〇戸……

と復原されることになる(ゴシック体は残存部)。

『県史』は(その復原数値に誤りがあるが、それはさておき)、この復原方法の基に不明給主について、全給の某人甲を新田部親王、某人乙を藤原宮子とし、半給者については、虎尾説が個人2人としたのに対して、某人丙と某寺丁とし、後者を飛鳥寺と推定している。

他方、中西氏は、全給者を新田部親王と某内親王、半給者を某人丙と四天王寺と推測している。これらの点は、次の浅野説ともども、❶・❷で改めて検討したい。

❸……………「相摸国印」の位置からの復原—浅野充説によせて—

近時、浅野充氏は、『県史』をはじめ従来諸説が、B断簡(第9紙)冒頭行の租4152束が尺度郷の租2528束と荏草郷の租1624束の合計額となることを根拠に、尺度郷50戸と荏草郷50戸の計100戸を某人乙の全封戸と理解して鎌倉郡100戸を復原し、(あ)(い)のごとく復原したことを批判し、次を指摘した。

Ⅲ 某人乙の全封戸が鎌倉郡尺度郷・荏草郷の計100戸であると断定することはできない。

Ⅳ 某人乙の全封戸は100戸以上であり、そのうち100戸が鎌倉郡に置かれていた可能性がある。

Ⅳを採用するならば、(あ)の数値は某人甲全封戸と某人乙の鎌倉郡以外の封戸の合計額となり、(い)のそれは某人乙の封戸のうち鎌倉郡に所在した封戸のみの内訳となる。このことは、復原された数値の面では同一であるが、封主との関係において大いに異なるものがある。

さらに、浅野氏は、虎尾説を除く従來說が、不明な半給給主を一個人(某人丙)と一寺院(某寺丁)としたのに対して、改めて虎尾説の可能性を喚起し、また、『県史』が某人甲を藤原宮子としたのに対して、宮子が皇后宮(光明子)や舍人親王の後に記載されるのは不自然であると批判し、阿部内親王ないし安積親王の可能性を新たに指摘している。

結論から言うならば、浅野説Ⅲ・Ⅳは妥当であろう。浅野氏も加減乗除による復原方法のみ用いたため断案とはできず、従來說との二案の併記に留めているが、ここで「交易帳」に押されている「相摸国印」の位置に留意するならば、Ⅲ・Ⅳの言わんとすることをさらに進めて、

V 某人乙の全封戸は100戸以上である。そのうち100戸が鎌倉郡尺度郷・荏草郷の計100戸であって、それ以外は鎌倉郡以外に置かれていた。

ということの証明は可能である。

すなわち、「交易帳」の残存部には、計76面の「相摸国印」が末尾の署名部の4面を除いて24列

に3面ずつ押されている。⁽¹⁸⁾

着目すべきは、首部・署名部を除いた封主毎の記載行の第1印面の位置である。その位置は、書き出しの封主名が記載されている行を含む場合は高く、横界線の第1線と第2線の間に印面の上端部がくるように押されている。これに対して、封主名を含まない行に押される場合は、それよりも低く、山形女王の封戸部を除いて、横界線の第2線以下に印面の上端部がくるように押されている。山形女王の場合は、5行にわたり記載があり、名を含む1行目と2行目に印面第1列が、3～5行に印面第2列が押されていて、第2列目は他の例と違って横界線の第1線と第2線の間に第1印面の上端部がきているが、これとても第1列目の印面よりは明らかに低い位置から押し始めている。

このことを念頭に置いて問題のB断簡(第9紙)冒頭を見ると、そこに押されている印面は、第1面が横界線の第2線以下よりはじまる、つまりは封主名記載行を含まない部分に押されるそれである。すなわち、第9紙d行の左の縦第2界線の右約0.3ミリに第1印面の下端の左端が位置するので、下端の右端は「相模国印」の方5.95センチを考慮するに、縦第2界線より5.98センチ右の欠佚部にあったことになり、d行の間隔1.85センチを基に欠佚部の縦界線を想定すると、本来第9紙の第1印面は【図1】のごときとなる。⁽¹⁹⁾

したがって、当該の部分(尺度郷50戸と荏草郷50戸の合計部)は、某人乙の全封戸を示すのではなく、その一部の鎌倉部100戸のみの書き上げであることになり、某人乙の位階と名を含む100戸以上の封戸の合計部記載行とその鎌倉郡以外の封戸の記載行は、B断簡の第1印面とは別の印面を押されて当該部の右の欠佚部にあったことになる。

以上でVは確認されたことと思う。ならば、『県史』ほか(あ)(い)と復原した部分は適当なものではない。この部分は

(う) 某人甲食封 α 1 戸

田 α 2

不輸租田 α 3

見輸租田 α 4

租 α 5

(α 1 戸所在郡など明細)

(え) 某人乙食封 β 1 (三〇〇 - α 1) 戸

田 β 2 (九九三町四段二四四歩 - α 2)

不輸租田 β 3 (二一四町三段一四八歩 - α 3)

見輸租田 β 4 (七七九町一段九六歩 - α 4)

租 β 5 (一一六八六束九把 - α 5)

某 郡 γ 1 (β 1 - 〇〇) 戸

田 γ 2 (β 2 - 三七五町二段二六三步)

不輸租田 γ 3 (β 3 - 九八町四段二六三步)

見輸租田 γ 4 (β 4 - 二七六町八段)

租 γ 5 (β 5 - 四一五二束)

(第9紙)	B断簡	欠佚部		
d		c	b	a

254

鎌倉郡一〇〇戸 田三七五町二段二六三歩 不輸租田九八町四段二六三歩

見輸租田二七六町八段 租四一五二束

尺度郷五〇戸……

荏草郷五〇戸……

と復原されるのが正しいことになる（ゴシック体は現存部⁽²⁰⁾）。

①……………全給不明給主の推定

②でみたように『県史』は、某人甲・乙をそれぞれ新田部親王・藤原宮子とするが、その振り分けの根拠は確たるものは示していない。

一方、西村氏は、天平11（739）年の封戸租全給制開始（『続日本紀』）以前の和銅7（714）年に特例として封戸租が全給された（『続日本紀』）二品長親王（靈龜元年六月没）・舎人親王（天平7年11月没）・新田部親王（天平7年9月没）、三品志貴親王（靈龜2年8月没）⁽²¹⁾・従三位長屋王（天平元年2月没）のうち、天平7年段階で生存しているのが舎人親王・新田部親王であるから、某人甲・乙のうち1人は新田部親王であるとした。「交易帳」の作成は天平7年閏11月であるから、その時点で新田部親王は死亡しているが、同じく死亡している舎人親王が記載されているように、その年の死亡ならば問題はない⁽²²⁾。

さらに中西氏は、明石一紀氏が、某人甲・乙を親王および内親王としたのを受け、某人甲・乙への振り分けはしないものの、それを新田部親王のほか、靈龜元（715）年正月に100戸の増封を受けている（『続日本紀』）三品泉内親王、四品水主内親王、長谷部内親王のうち1人に想定している。これは、この時に先の親王らの封戸租全給の特例同様にこれら内親王も全給になったものと想定した上のものである。ただし、泉内親王は天平6年2月に死亡している（『続日本紀』）から除くべきである⁽²³⁾。

他方、浅野氏は、新田部親王説を認めるも、残る1人については、公式令平出条での称号の記載順序による皇太夫人である宮子が、皇后宮（光明子）や舎人親王の後に記載されることはないとして『県史』説を否定し、西村説については、3内親王の封戸が全給になった確証がないとして可能性の一つに留め、私案として、阿倍内親王ないし安積親王をあげている。

『県史』に対する浅野氏の批判は妥当なものであり、宮子説は成立しないであろう。ただし、浅野氏が提示した阿倍内親王ないし安積親王説も、根拠とする『続日本紀』天平宝字4（760）年6月乙丑条の光明子崩伝「神龜元年。聖武皇帝即位授正一位爲大夫人。生高野天皇及皇太子。（中略）。天平元年尊大夫人爲皇后。湯沐之外更加別封一千戸。及高野天皇東宮封一千戸。」に錯乱があること⁽²⁴⁾、たとえ両者の封戸の存在を認めるにしろそれが相模国に置かれ、さらに中西説同様に封戸租全給であった確証はないので、浅野氏自らが言うように可能性の一つということになろう。

天平2（730）年の「紀伊国正税帳」と「越前国正税帳」、天平6年と10年の「周防国正税帳」にも、全給封戸が載るから、全給封戸主は先の例のほかにも存在が考えられるが、この点は、筆者にも特に断案はない。一応ここでは、西村氏が挙げた3人から泉内親王を除き、浅野説を加味して（阿倍内親王・水主内親王・長谷部内親王の1人）、（安積親王）の順に可能性が高いとしておくこ⁽²⁵⁾

とにする。

⑤……………半給不明給主の推定

従来の復原諸説を総合し整理するに半給封戸の復原は【表2】となり、変数 $W \cdot X \cdot Y \cdot Z$ の関係は次となる。一つの変数に集約も出来るが、その変数の特定は不可能である。ただし、幸いにし $W \cdot X \cdot Y \cdot Z$ の上限・下限は特定されるので、不明半給2所の輸租率等の範囲も特定される。

$$W = X + 78\text{町}4\text{段}144\text{歩}$$

$$Y = Z \text{イ} + 498\text{町}9\text{段}24\text{歩} = Z \text{ロ} + 498\text{町}9\text{段}72\text{歩}$$

$$W + Y = 697\text{町}0\text{段}250\text{歩}$$

$$X + Z \text{イ} = 119\text{町}7\text{段}82\text{歩}$$

$$X + Z \text{ロ} = 119\text{町}7\text{段}34\text{歩}$$

$$198\text{町}1\text{段}178\text{歩ないし}226\text{歩} \geq W \geq 78\text{町}4\text{段}144\text{歩}$$

$$119\text{町}7\text{段}34\text{歩ないし}82\text{歩} \geq X \geq 0\text{歩}$$

$$618\text{町}6\text{段}106\text{歩} \geq Y \geq 498\text{町}9\text{段}24\text{歩ないし}72\text{歩}$$

$$119\text{町}7\text{段}34\text{歩ないし}82\text{歩} \geq Z \geq 0\text{歩}$$

実際問題として、某人丙・某所丁の不輸租田 $X \cdot Z$ がゼロということはないであろう。確定している半給主の1戸ごと田数や、輸租率などから統計学的に算出するならば、 $W = 100\text{町}$ 前後、 $X = 20\text{町}$ 前後、 $Y = 600\text{町}$ 前後、 $Z = 100\text{町}$ 前後となる。

さて、半給の不明給主2所について、虎尾氏は、D断簡の檜前女王の前の欠佚部に2所（某人丙・丁）を想定し、浅野氏もその可能性を支持している。某人丙は封戸の記載の一部が見えるから当該部に個人1人の封戸記載があったことは確定である。一方、『県史』や野々村氏、西村氏などは、檜前女王の前には某人丙の1人として、残る1所をD断簡末尾の大官寺の次の欠佚部に、『県史』は飛鳥寺、西村氏は四天王寺と復原している。大官寺（大安寺）の次に復原するならば、それは某寺丁、しかもその封戸数は180戸～200戸になるから畿内の大寺クラスということになる⁽²⁶⁾。

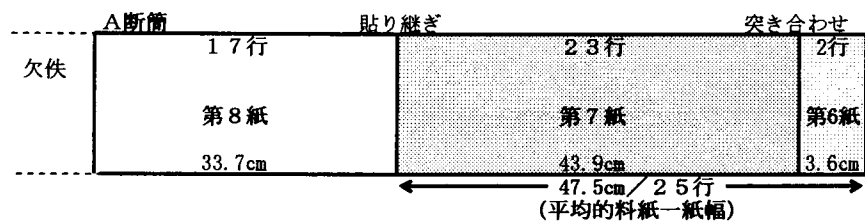
このいずれかは、加減乗除による「虫食い算」的復原方法では断定は不可能であるが、「交易帳」に用いられている料紙一紙の紙幅や界線間・行数に正税帳や戸籍などと同様に均一性があることを認めるならば、石上英一氏が提唱した「料紙の使用法による復原」⁽²⁷⁾の手段を用いることにより、虎尾説が妥当となり、欠佚部の半給給主は個人2人（某人丁・某人丙の順）となる（図2参照）。

すなわち、先ず、「交易帳」冒頭のA断簡の連続する第6～8紙を見るに、第6紙右端から第7紙左端までが一紙であり、長さ47.5センチ、縦界線間25行となる。これを「交易帳」の平均的料紙幅とする（図2①）⁽²⁸⁾。

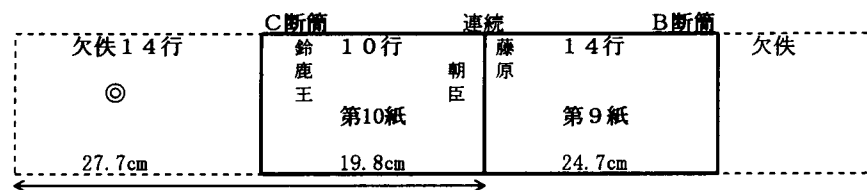
次に、中間に0.1～0.2ミリの欠があるも欠行なく藤原朝臣（武智麻呂）⁽²⁹⁾の封戸記載として内容が連続するB断簡（第9紙）とC断簡（第10紙）は、その横界線が連続しないことから、もともと別の紙を繋ぎ合わせたものとわかり、第9紙左端が本来の料紙一紙のほぼ左端、第10紙右端が本来の料紙一紙のほぼ右端となる。

よって、当面の問題となるC断簡は右側に欠佚部はほとんどなく、あっても0.1～0.2ミリである。

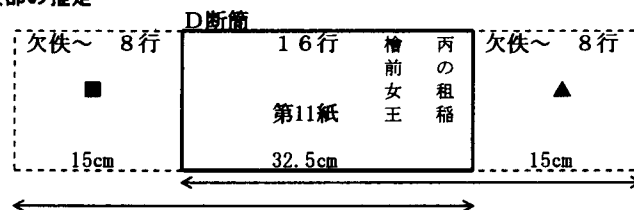
①平均的料紙幅の設定



②第10紙左欠佚部の推定



③第11紙両端の欠佚部の推定



④中間一紙の想定

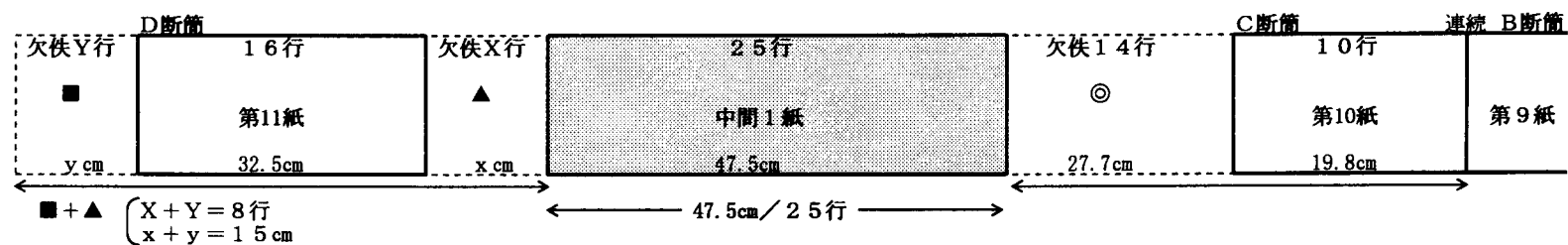


図2 「相摸国封戸租交易帳」の料紙の復原

この第10紙は19.8センチ、10行で、界線間は1.95センチであり、一紙の推定行数は24行（ $47.5 \div 1.95$ ）であるから、想定した平均料紙幅との差27.7センチ、14行が第10紙の左側の欠佚部となる（図2②）。同様に、D断簡（第11紙）を考えると、第11紙は32.5センチ、16行で、界線間は2.0センチであるから、一紙の推定行数は24行（ $47.5 \div 2.0$ ）となるが、両端が本来の料紙一紙の両端にはなっていないので、左右いずれかまたは双方に欠佚部が想定される。左右いずれかだけに欠佚があるとする、それは15センチ、8行となる。ならば可能性として、C断簡左側欠佚部とD断簡右側欠佚部の合計は、最低27.7センチ（D断簡右欠佚部▲なし）、14行、最高42.7センチ（D断簡左欠佚部■なし）、22行となる（図2③）。

問題は、この欠佚部の紙幅に書き上げられ得る半給封戸主の記載が1人分か2人分かということである。

D断簡の檜前女王の記載の右には、前の封戸主（某人丙）の租稲1176束余の記載が2行残されている。額的にそれは30～50戸の1郷分であり、その封戸主の封戸の記載行は4～5行が想定される。他方、C断簡の残存左端の鈴鹿王の記載は、見輸租田の書き出し1文字目までの3行であり、続き欠佚部に見輸租田の記載のあらかたと、租稲の記載の2行が想定される。この両者の想定行を合計するに6～7行程度となる。

したがって、1人分とするならば、C断簡左側欠佚部とD断簡右側欠佚部を最低（▲なし）の27.7センチの14行としても、本来の料紙一紙に記載のない余白が7～8行（14行－6～7行）生じてしまうことになる。

すなわち、この余白を出さないようにするには、C断簡左側欠佚部とD断簡右側欠佚部（◎＋▲）に2人分の封戸の記載（某人丁・某人丙の順）を想定せざるを得ないのであり、よって虎尾案が妥当ということになるわけである。

ただし、この場合でも、本来の第10紙と第11紙の間にもう一紙想定しなければならないことになる（図2④）。何とならば、2人分の封戸の記載をC断簡とD断簡の間に想定すると、それは合計230戸となるから、その内訳は最低でも5郷、これに2人の総記や舍人親王の余綾郡のように1郡に複数郷があった場合の郡ごとの集計部が加わることになる。その記載には、1郷に4行、総記や郡集計部も同じく4行として、そこから残存部の某人丙の2行を差し引いても、最低でも26行となる。とすると、C断簡左側欠佚部とD断簡右側欠佚部（◎＋▲）を最高（■なし）の42.7センチ、22行としても、それには足りないことになるからである。

当該部分は、たとえば本稿末に掲げた復原案のようになっていたのではなからうか。⁽³⁰⁾

さて、某所丁が寺院でなく個人としたならば、その某所丁は葛城王の可能性が高い。

某人丙は30～50戸の1郷、某人丁が180戸～200戸の4郷となろうから、その組み合わせは、30戸と200戸、40戸と190戸、50戸と180戸のいずれかとなる。

この場合に、某人丁はその記載位置からして、品位ではなく従三位鈴鹿王から従四位下檜前女王の間の位階を持つこととなり、且つその封戸は最低でも180戸となる。ならば、慶雲3（706）年格制（『令集解』）の位封は従三位200戸、正四位100戸、従四位80戸であるから、これがすべて位封であるとするれば、従三位の人物の全位封の200戸と考えてよいのではなからうか。

しかし、位封のみでなく職封をも含む可能性が残る。「交易帳」には、40戸や30戸の半端な封戸

数も見られるが、浅野氏が指摘するように、前者は女性従四位の位封40戸の全封戸、後者は従四位になってはじめて与えられる位封80戸のうちの1郷50戸の残余であり、不自然な数値ではない。

さて、天平7年の時点で職封が与えられる参議以上は、知太政官事舎人親王、右大臣武智麻呂、中納言多治比県守（正三位）、参議藤原房前（正三位）、同藤原宇合（同）、同藤原麻呂（従三位）、同鈴鹿王（同）、同葛城王（同）、同大伴道足（正四位下）であるから、麻呂、葛城王、道足の3人しか某人丁の記載位置には該当しない。⁽³¹⁾「交易帳」の封戸主の記載順は、浅野氏が指摘するように、位階順で同一位階ではその位階に叙された順であるから、麻呂、鈴鹿王、葛城王の従三位叙位を確認するに、麻呂が神亀6年（天平元年）3月、鈴鹿王と葛城王が同時叙位で天平4年正月であり、結果、麻呂は鈴鹿王の後の某人丁には該当しないことになる。

すると、某人丁と封戸数については、

①200戸 葛城王の従三位の位封200戸

②190戸 葛城王の従三位の位封より150戸と参議の職封80戸の半分40戸

③180戸 葛城王の従三位の位封200戸・参議の職封80戸より180戸

または、道足の正四位の全位封100戸と参議の全職封80戸

のいずれかということになるが、女性従四位の位封と違って参議の職封80戸を40戸ずつに別けたとは考え難いので、②は成立しない。残るは①か③となるが、これは①ではなかろうか。

③の場合に、『公卿補任』が天平3年開始とする参議封戸が『続日本紀』に載らず天平7年段階で参議に封戸があったか確証が持てない点、「交易帳」が同じ参議である鈴鹿王に参議の肩書きを付けない点などが難点となるからである。仮に天平7年段階で参議に80戸の封戸があったとしても、「交易帳」には参議の職封はなかったのではなかろうか。なお、先の封戸数の組み合わせを、全体の平均と比べると【表3】となる。

次に、残る某人丙は、某人丁が従三位葛城王であった場合に正四位上から従四位下の位階を持ち、道足であった場合に正四位下から従四位下の人物で、正四位下の場合には道足よりも後に（天平元年3月以降）正四位下に、従四位下の場合に檜前女王より先に（檜前女王の従四位下叙位時期不明）従四位下に叙された人物となる。候補が多く特定は不可能であろう。

実は『続日本紀』天平3年8月11日条に、所司の挙によって参議に任ぜられた6人のうち後の3人が鈴鹿王・葛城王・道足の順序であることを思うとき、鈴鹿王に続く某人丁が葛城王であり、続き某人丙が道足であるような気がしないでもないが、これはまったくの印象論である。

したがって、ここでは一応、某人丁の候補として、一別勅封存在の可能性を除いて、第1に葛城王、第2には大伴道足の名を挙げておくことにしたい。

おわりに－「交易帳」の作成レベルについて－

最後に、今回の復原作業を通じて気付いた点を二、三あげておくことにする。

「交易帳」の数値に関しては、虎尾氏が指摘したⅠ・Ⅱの操作が施されている。この操作は、国・郡・郷のどの段階で行われたものであろうか。

この点について明石氏は、虎尾氏の指摘に加えて、輪租田の段数が奇数の場合は、埼取郷を除い

て120歩に統一され、段数が偶数の場合は、過半数の6例が0歩あるいは240歩になっていることから、

VI 束数以上を維持して把数すらも端数として回避しようとした操作が行われている。

とし、その操作の徹底・不徹底が郡ごとに違いがあるとして、郡単位で田積（段歩数）の調整がなされていると指摘した。さらに、明石氏は、この調整が徹底している余綾郡・鎌倉郡において、舍人親王封戸の余綾郡輸租田が209町、某人丙封戸の鎌倉郡輸租田が276町8段と歩数がないことから、「封主ごとの輸租田積の集計値が一国規模においてではなく一郡ごとに整備されている事実は、（中略）、細かい田積が国や郷レベルではなく郡レベルで操作されたことの結果である」とし、各郷の封戸輸租率も郡による平均化の操作が行われていると指摘したうえで、「交易帳」全体に適用されている「不三得七法」（全体の輸租率は70.1パーセント）を郡レベルの操作によるものとした。ただし、「不三得七法」は、一国内の応輸租田の総計に適用されるものであり、封戸の応輸租田額に単独で反映されるものではないから、「交易帳」をストレートに「不三得七法」で論じることはできない⁽³²⁾。

一方、浅野氏は、舍人親王の封戸においてVIの操作が、余綾郡ではなされているも、足上郡や足下郡ではなされていない、すなわち封戸主別の調整はされていないことに着目し、封戸主と封戸の直接的関りを想定することはできず、むしろ「全体としては国の、個々には郡の自律的調整を考えるべきである。」としている。これは、中西氏が「交易帳」のような一般の封戸では封戸主による私出挙・交易は行われず、国司が運営していたとしたものを支持する見解であり、と同時に『県史』が「交易帳」に天武系皇族が多いことから、相模の地とそれら天武系皇族との個別のかつ直接的な関係を、前代に遡らせたことに対する批判となっている。

当時の皇族はほとんどが天武系であるから、『県史』の指摘は当を得ていないとする浅野氏の指摘は正しい。また、封戸が全体としては国司の手によって管理・調整されていたとする西村・浅野両氏の指摘も妥当であろう。

「交易帳」において、田数や租稲数の調整は、最終的なものにせよ、国レベルで行われているのであり、虎尾氏、明石氏が指摘した操作は「交易帳」を作成する最終段階に国司の手によってなされたものである。

そのことは、「交易帳」の擦削痕を分析すると容易にわかる。すなわち、「交易帳」には、多くの擦削、書き直しがある（稿末復原私案参照）。一番よい例は某人丙の租稲記載

租壹仟壹伯柒拾陸束陸把（納官五百八十八束三把 給主五百八十八束三把）

の部分である。この部分は、2ヶ所の「三把」の下に2字擦削の痕があり、また「陸把」の「陸」は擦削して書き直したものである。これは、本来この部分の数値が

租壹仟壹伯柒拾陸束陸把（納官五百八十八束三把五分 給主五百八十八束三把五分）

であったものを、後に把の単位以上に整えるために「五分」を削り取り、それに合わせて「柒把」を「陸把」に書き直したものである。すなわち、郡から国へ上がった段階で某人丙の租稲額には把より下のものがあり、虎尾氏が指摘した田租額の把未満回避の操作（I）は、国レベルで行ったものであることがわかる。また、三嶋王の田積で

不輸租田肆拾捌町柒段玖拾貳歩 見輸租田壹伯貳拾玖町伍段貳伯壹拾陸歩

の「段玖拾貳歩」と「伯壹拾陸歩」が書き直されているなどの調整は、虎尾氏が指摘した半給の見輸租田の歩数を48の倍数に調整（Ⅱ）した結果、不輸租田の歩数を書き直したものである。

その他の擦削・書き直しを見ても、それは記載のほとんどを書き直している檜前女王封戸の部分を除き、段・歩と租稲部分に限られ町の単位に及んでいない⁽³⁴⁾。また、その書き直しは、「交易帳」冒頭の1国の総記部分の段歩にも及んでいる。このことは、これらの擦削・書き直しが単純な書き間違えを直したのではなく、段・歩数ないしは租稲数を直したために、郷単位、封戸主単位、ひいては国内全体と連動的に数値が書き直されたものであることを示している。

すなわち、「交易帳」の段・歩数、租稲数は、郷や郡、あるいは封戸主ごとにではなく、国内を通して総合的に調整が図られているのであり、そのⅠ・Ⅱ・Ⅵの操作は郷や郡レベルのものではなく、国衙レベルで行われたことが明白なのである。

毎年のことであるから、郡によっては、国衙の調整を熟知し、それに沿う形で事前調整を行っていた郡もあるかもしれない。書き直しが田積の町の単位に及んでないことは、この点に示唆的である。「(壹) 伯」「拾」を除く数値に書き直しが全く見られない足下郡、余綾郡、鎌倉郡には、そうした可能性もある。この3郡は郡内の複数郷の輸租率が近似していて、この点、書き直しが多く見られる大住郡の2郷の輸租率に15ポイントの差が見られるのと対照的である。

しかし、全体としての「交易帳」の数値は、国衙の調整操作による結果と位置づけて良いのではなかろうか。また、極端に詰め書きしてある檜前女王の記載は、その冒頭の「従四位下」から租稲の「租壹仟壹伯参束」までを書き直しているも、続く納官・給主の内訳部分は書き直してはいない。これは、次の三嶋王の記載のように5行に書かれるべきを中間2行をとばして（封主自体も間違えた可能性もある）、三嶋王の記載まで書き続けてしまった。そこで、三嶋王の記載以下に書き直しが及ばないように無理に3行に詰め込んだものであろう。こうしたことは、「交易帳」を纏めるに際して先ず個々の封主ごとの書き上げがあり、それを並べて単純に書き写した際に起こりうることである。

おそらく、国衙では、次の作業を行ったのであろう。①郡から報告された封戸の田積を町を単位に不輸租田額を調整しながら封主別に書き上げ、国内総計を算出した。②それを「交易帳」に纏めた。③しかし、調整し残し部分や調整ミス、書き損ないがあったので、さらに段歩の修整や書き直しを行った。その痕が、擦削、書き直しによく表れている。そして本来④清書すべき所を、すでに違期となっている貢調使に清書をせずして急ぎ携えたのではなかろうか。⁽³⁵⁾他の公文と比べると「交易帳」は、比較的多くの書き直しがそのままになっていることや国印の押し方が雑なのはそのせいであろう。

以上、この「交易帳」の数値から、郡の自律性を過大に評価することはできない。むしろ、国衙レベルによる封戸の管理に着目すべきと考えるが、いかがなものであろうか。

最後に、「交易帳」の復原私案を掲げ、冗長に流れた稿を閉じることにしたい。

(1997年9月稿、1998年7月改稿)

正六位上行介勲十二等粟田朝臣堅石

正七位上行大目田邊史廣山

E 断簡・第12紙左端

〔追記〕

「交易帳」複製の実見に関して国立歴史民俗博物館の吉岡眞之・仁藤敦史・石渡芳樹氏にご高配戴いたこと、田籍等計算の便宜に宮本耕治氏にパソコンソフト用町段歩計算マクロを作成して戴いたこと、また、本稿脱稿後の神奈川古代史研究会（一九九七年九月）及び正倉院文書研究会（同十月）で本稿の内容を報告する機会を頂戴し、多くの方よりご教示戴いたこと、記して深謝申し上げます。未だすべて咀嚼できてはいませんが、ご教示戴いた点を受け、本文・註とも一部補訂しました（一九九八年七月）。

17 大官寺食封高座郡壹伯戸田参伯肆拾伍町玖段

18 参伯壹步不輸租田貳伯貳拾肆町壹伯

D 断簡・第11紙左端

19 三十三步(イ)／八十一歩(ロ)見輸租田一百二十一町九段

第11紙左欠佚部

20 一百六十八步租一千八百二十九束二把(イ)／一百二十歩租一千八百二十九束(ロ)

21 納官九百一十四束六把(イ)
給主九百一十四束六把

／納官九百一十四束五把(ロ)
給主九百一十四束五把

22 □ □ 郷 ○ ○ 戸

中間? 紙右端

23 □ □ 郷 ○ ○ 戸

24 1 2 3 4 5 6 7 ~
〔以下、租稲を輕貨に交易し、封主に送る収支関係の記載が想定されるが、
内容・行数・料紙枚数など不明〕

中間? 紙左端

第12紙右欠佚部

附運調使史生大初位上王善徳進上

E 断簡・第12紙右端

以解

天平七年閏十一月十日 正八位下行少目兼伊美吉三田次

從五位上行守勲十二等田口朝臣 朝集使 正六位上行掾勲十二等酒波人麿

□□郷○○戸

23 (從三、從四位下)

24 ○○位某人丙食封◇◇郡□□郷三十？戸

25 田W (X+78町4段144歩)

1 不輪租田X

2 見輪租田七十八町四段一百四十四歩

3 租壹仟壹伯柒拾陸束納官五百八十束三把 (二字擦削)

4 給主五百八十八束
三把 (二字擦削)

5 從四位下檜前女王食封御浦郡冰蛭郷肆拾戸田壹伯玖町柒段壹伯伍拾

6 參歩不輪租田參拾陸町貳段參拾參歩見輪租田柒

7 拾參町伍段壹伯貳拾歩租壹仟壹伯參束
納官五百五十一束五把
給主五百五十一束五把

8 從四位下三嶋王食封大住郡埼取郷伍拾戸田壹伯

9 柒拾捌町貳段參伯捌歩不輪租田肆

10 拾捌町柒段玖拾貳歩見輪租田壹伯貳

11 拾玖町伍段貳伯壹拾陸歩租壹仟玖

12 百肆拾參束肆把
納官九百七十一束七把
給主九百七十一束七把

13 從四位下高田王食封鎌倉郡鎌倉郷參拾戸田壹伯參拾

14 伍町壹伯玖歩不輪租田貳拾玖町捌段壹

15 伯玖歩見輪租田壹伯伍町貳段租壹仟

16 伍伯柒拾捌束
納官七百八十九束
給主七百八十九束

中間一紙左端
第11紙右欠佚部

D 断簡・第11紙右端

18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 24 23 22 21 20 19 18

□
□
郷
○
○
戸

◇
◇
郡
○
○
戸

□
□
郷
○
○
戸

□
□
郷
○
○
戸

◇
◇
郡
○
○
戸

中
間
一
紙
右
端

20	拾陸歩不輸租田肆拾壹町壹段参伯伍	〔 続 接 〕	B 断簡・第9紙左端	
21	拾陸歩見輪租田壹伯捌町貳段貳伯			
22	肆拾歩租壹仟陸伯貳拾肆束			
23	右大臣從二位藤原朝臣食封大住郡仲嶋郷伍拾戸			
24	田貳伯壹拾陸町柒段参伯肆拾貳歩不			
25	輪租田貳拾柒町肆段貳伯貳拾貳歩			
1	見輪租田壹伯捌拾玖町参段壹伯			C 断簡・第10紙右端
2	貳拾歩租貳仟捌伯肆拾束 納官一千四百廿束 給主一千四百廿束			
3	從三位山形女王食封御浦郡走水郷伍拾戸田壹伯			
4	壹拾捌町肆段柒拾陸歩不輪租田貳拾			
5	柒町貳段参伯壹拾陸歩見輪租田玖拾壹			
6	町壹段壹伯貳拾歩租壹仟参伯陸拾			
7	柒束 納官六百八十三束五把 給主六百八十三束五把			
8	從三位鈴鹿王食封高座郡土甘郷伍拾戸田壹伯			
9	柒拾捌町陸段参伯伍拾参歩不輪租田			
10	壹伯壹拾町肆段陸拾伍歩見輪租田陸	C 断簡・第10紙左端		
11	十八町二段二百八十八歩租一千二十			
12	四束二把 納官五百五十二束一把 給主五百五十二束一把			
13	○位某人 丁食封二百戸 田 Y (Z イ・ロ + 498 町 9 段 24 歩 (イ) または 72 歩 (ロ)) ○ (從三位?) ○ (葛城王?)			
14	不輪租田 Z イ・ロ			
15	見輪租田四百九十八町九段			
16	二十四歩租七千四百八十三束六把 (イ)		／／ 納官三千七百四十一束九把 (ロ) 給主三千七百四十一束八把 (イ)	
17	納官三千七百四十一束八把 (イ) 給主三千七百四十一束八把 (イ)			

19	20	21	22	23	24	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
◇	◇	郡	□	□	郷	(五〇?)	戸																	
◇	◇	郡	□	□	郷	(五〇?)	戸																	

18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 24 23 22 21 20 19 18

五束

□ □ 郷 (五〇?) 戸

□ □ 郷 (五〇?) 戸

□ □ 郷 (五〇?) 戸

◇ ◇ 郡 □ □ 郷 五十戸 田 一百七十町八段三百三十一

歩 不 輪 租 田 四十一町二段九十一歩 見 輪 租

田 一百二十九町六段二百四十歩 租 一千九

百 四 十 五 束

某人 甲 (新田部親王?) 食 封 $\alpha 1$ (一五〇?) 戸 田 $\alpha 2$

不 輪 租 田 $\alpha 3$

見 輪 租 田 $\alpha 4$

租 $\alpha 5$

◇ ◇ 郡 □ □ 郷 (五〇?) 戸

第8紙左欠佚部

中間一紙右端

足下郡垂水郷伍拾戸田壹伯柒拾貳町參段貳伯肆拾步

壹伯貳拾柒町肆段貳伯壹拾陸步租壹仟

餘綾郡中村郷伍拾戸田壹伯陸拾柒町壹段壹伯柒

〔直接貼継〕 〔継目裏書 相摸国天平七年封戸租交易帳〕

A 断簡・第8紙右端

一品舍人親王食封參伯戸田捌伯肆拾玖町貳段貳伯肆拾陸

步不輸租田貳伯捌拾壹町柒段壹伯伍拾

見輸租田伍伯陸拾柒町伍段

拾陸步 租捌仟伍佰壹拾貳束玖把

足上郡置本郷伍拾戸田壹伯貳拾参町貳伯参拾陸步不輸

租田壹拾捌町肆段壹伯肆拾步 見輸租田

壹伯肆町陸段玖拾陸步租壹仟伍伯陸

拾玖束肆把

足下郡高田郷伍拾戸田壹伯陸拾柒町參段貳伯伍拾

玖步不輸租田肆拾參町壹段壹伯參拾

玖步見輪租田壹伯貳拾肆町貳段壹伯

貳拾步租壹仟捌伯陸拾參束五把

餘綾郡壹伯伍拾戸田參伯捌拾柒町玖段壹伯肆

拾步不輸租田壹伯柒拾捌町玖段壹伯肆

拾步見輪租田貳伯玖町租參仟壹伯參拾

②復原した数値は小字を用いた

③擦削、書き直しの部分は『正倉院古文書影印集成』の解説に基づき網掛けにした。

④行替えは原文書および復原を反映するが、字間・行の長さは印刷の都合による。

A 断簡・第6紙

2 相摸国司解 申天平七年封戸租事

〔本来一紙〕

3 合八郡食封壹拾參處壹仟參伯戶田肆仟壹伯陸拾貳町貳段貳

A 断筒・第7紙右端

伯以步不輸租田壹仟貳伯肆拾肆町參段壹伯陸拾

步見輪租田貳仟玖佰壹拾柒町玖段肆拾捌步

租肆萬參仟柒佰陸拾捌束柒把

全給肆處深伯戸田貳仟壹伯捌拾貳町貳段壹伯壹拾柒步

不輸租田陸伯貳拾町陸段壹伯捌拾玖步見輸租田壹

仟伍伯陸拾壹町伍段貳伯捌拾捌步租貳萬參仟

肆伯貳拾叁束柒把

半給玖處陸伯戸田壹仟玖伯捌拾町玖拾貳步不

輸租田陸伯貳〔拾脱力〕参町陸段参伯参拾貳步見輸租

田壹仟參伯伍拾陸町參段壹伯貳拾步

租貳萬參伯肆拾伍束	納官一萬一百七十二束五把	給主一萬一百七十二束五把
-----------	--------------	--------------

合全給參萬參仟伍伯玖拾陸束貳把

皇后官食封壹伯戸田參伯參拾玖町肆段參伯肆拾柒步不輸

租田壹佰貳拾肆町伍段貳佰伍拾壹步見輪租

田貳伯壹拾肆町玖段玖拾陸步租參仟貳伯貳拾參

【表1】「相模国封戸租交易帳」の料紙

残存断簡	正集十九巻 の用紙	縦 cm	横 cm	一紙幅 cm	縦界線間隔 標準値 cm	現存 行数	一紙行数 ()は推定	国印 免数	『大日本古文書』 巻一頁	備 考	裏 文 書 (2次文書)	『大日本古文書』 巻一頁
A 断簡	第 6 紙	27.9	3.6	47.5	2.0	2	25	33	1 の635～637	第6紙と第7紙は本来一紙。直接接続（裏からかすがい）。 第6紙右端が「交易帳」のおよそ一紙のはじめ。 第7紙と第8紙は直接貼継。第7紙を上に糊代0.25cm。 継目裏書「相模国天平七年封戸租交易帳」あり。	天平18年10月12日布施按	24の385～387
	第 7 紙	28.0	43.9		2.0	23						
	第 8 紙	28.0	33.7		2.0	17						
B 断簡	第 9 紙	28.0	24.7		1.85	14	(25)	12	1 の637～638	第9紙と第10紙は中間0.1～0.2mm欠なるも欠行なく内容連続。 第10紙右端がおよそ一紙のはじめ。	天平18年閏9月27日経師手実	9 の275～276
C 断簡	第 10 紙	28.0	19.8		1.95	10	(24)	9	1 の638～639		天平18年閏9月27日経師手実	9 の275
D 断簡	第 11 紙	28.1	32.5		2.0	16	(24)	18	1 の639～640		天平18年閏9月26日経師手実	9 の274～275
E 断簡	第 12 紙	28.1	15.3		1.8	9	(26)	4	1 の640	右端の国印三面は僅存。確認困難。	(天平18年)閏9月25日経師手実	24の379～380

※数値は『正倉院古文書影印集成』による。『正倉院文書目録』と僅かな計測差あり。

【表2】「相模国封戸租交易帳」の半給封戸（イ・ロは虎尾俊哉説による。Yはイ・ロ同値／斜体・網掛けは復原数値）

	封 戸 数 戸	田 数 町 段 歩	不 輸 租 田 町 段 歩	見 輸 租 田 町 段 歩	租 稲 束	納 官 束	給 主 束	輸 租 率
八 郡 全 体	1300	4162 2 209	1244 3 161	2917 9 48	43768.7	10172.5	33596.2	0.70
全 給 四 所	700	2182 2 117	620 6 189	1561 5 288	23423.7	0.0	23423.7	0.72
半 給 九 所	600	1980 0 92	623 6 332	1356 3 120	20345.0	10172.5	10172.5	0.69
半給① 従二位武智麻呂	50	216 7 342	27 4 222	189 3 120	2840.0	1420.0	1420.0	0.87
半給② 従三位山形女王	50	118 4 76	27 2 316	91 1 120	1367.0	683.5	683.5	0.77
半給③ 従三位鈴鹿王	50	178 6 353	110 4 65	68 2 288	1024.2	512.1	512.1	0.38
半給④ 従四位下檜前女王	40	109 7 153	36 2 33	73 5 120	1103.0	551.5	551.5	0.67
半給⑤ 従四位下三嶋王	50	178 2 308	48 7 92	129 5 216	1943.4	971.7	971.7	0.73
半給⑥ 従四位下高田王	30	135 0 109	29 8 109	105 2 0	1578.0	789.0	789.0	0.78
半給⑦ 大官大寺（イ）	100	345 9 301	224 0 133	121 9 168	1829.2	914.6	914.6	0.35
大官大寺（ロ）	100	345 9 301	224 0 181	121 9 120	1829.0	914.5	914.5	0.35
半給⑧ 従三～従四位下某人丙	30～50	W (X + 78町4段144歩)	X	78 4 144	1176.6	588.3	588.3	1～0.396
半給⑨ 某人不いし寺丁（イ）	180～200	Y (Zイ + 498町9段24歩)	Zイ	498 9 24	7483.6	3741.8	3741.8	1～0.806
某人不いし寺丁（ロ）	180～200	Y (Zロ + 498町9段72歩)	Zロ	498 9 72	7483.8	3741.9	3741.9	1～0.806
(参考) ⑧・⑨合計（イ）	230	697 0 250	119 7 82	577 3 168	8660.2	4330.1	4330.1	0.828
⑧・⑨合計（ロ）	230	697 0 250	119 7 34	577 3 216	8660.4	4330.2	4330.2	0.828

【表3】 某人丙と某人丁の封戸の想定

某 人 丙	田 数 W	一 戸 田 籍	一 戸 輸 租 田	一 戸 租 稲	某 人 丁	田 数 Y	一 戸 輸 租 田	一 戸 輸 租 田	一 戸 租 稲
三 〇 戸	78.4～198.2町	2.6～6.6町	2.6町	39.2束	二〇〇戸	498.9～618.6町	2.5～3.1町	2.5町	37.4束
四 〇 戸	78.4～198.2町	2.0～5.0町	2.0町	29.4束	一九〇戸	498.9～618.6町	2.6～3.3町	2.6町	39.4束
五 〇 戸	78.4～198.2町	1.6～4.0町	1.6町	23.5束	一八〇戸	498.9～618.6町	2.8～3.4町	2.3町	41.6束
全体平均		3.2町	2.2町	33.7束	半給平均		3.3町	2.3町	33.9束
					全給平均		3.2町	2.2町	33.5束

【表4】「相模国封戸租交易帳」の復原私案（斜体は復原数値／網掛けはレイアウト上のもの）

	封戸数 戸	応 輸 租 田 数			不輸租田（損田）			見 輸 租 田			租 稲 束	納官 束	給 主 束	輸租率	一戸ごと 田数 田	荒廃率	
八 郡 全 体	1300	4162	2	209	1244	3	161	2917	9	48	43768.7	10172.5	33596.2	70.1%	3.2	29.9%	
全 給 四 所	700	2182	2	117	620	6	189	1561	5	288	23423.7		23423.7	71.6%	3.2	28.4%	
半 給 九 所	600	1980	0	92	623	6	332	1356	3	120	20345.0	10172.5	10172.5	68.5%	3.3	31.5%	
全給① 皇后宮（光明子）	100	339	4	347	124	5	251	214	9	96	3223.9		3223.9	63.3%	3.4	36.7%	
足下郡垂水郷	50	172	3	240	44	9	24	127	4	216	1911.9		1911.9	73.9%		26.1%	
餘綾郡中村郷	50	167	1	107	79	6	227	87	4	240	1312.0		1312.0	52.3%		47.7%	
全給② 舍人親王	300	849	2	246	281	7	150	567	5	96	8512.9		8512.9	66.8%	2.8	33.2%	
足上郡岡本郷	50	123	0	236	18	4	140	104	6	96	1569.4		15469.4	85.0%		15.0%	
足下郡高田郷	50	167	3	259	43	1	139	124	2	120	1863.5		1863.5	74.2%		25.8%	
餘綾郡150戸合計	150	387	9	140	178	9	140	209	0	0	3135.0		3135.0	53.9%		46.1%	
某郡某郷	50	170	8	331	41	2	91	129	6	240	1945.0		1945.0	75.9%		24.1%	
全給③ 某人甲（新田郡親王？）	$\alpha 1$	$\alpha 2$			$\alpha 3$			$\alpha 4$			$\alpha 5$			$\alpha 5$	$\alpha 4/\alpha 2$	$\alpha 2/\alpha 1$	$\alpha 3/\alpha 2$
全給④ 某人乙	$\beta 1(300-\alpha 1)$	$\beta 2(993\text{町}4\text{段}244\text{歩}-\alpha 2)$			$\beta 3(214\text{町}3\text{段}148\text{歩}-\alpha 3)$			$\beta 4(779\text{町}1\text{段}96\text{歩}-\alpha 4)$			$\beta 5(11686.9\text{束}-\alpha 5)$			$\beta 5(11686.9\text{束}-\alpha 5)$	$\beta 4/\beta 2$	$\beta 2/\beta 1$	$\beta 3/\beta 2$
鎌倉部以外	$\gamma 1(\beta 1-100)$	$\gamma 2(\beta 2-375\text{町}2\text{段}263\text{歩})$			$\gamma 3(\beta 3-98\text{町}4\text{段}263\text{歩})$			$\gamma 4(\beta 4-276\text{町}8\text{段})$			$\gamma 5(\beta 5-4152\text{束})$			$\gamma 5(\beta 5-4152\text{束})$	$\gamma 4/\gamma 2$		$\gamma 3/\gamma 2$
鎌倉部100戸合計	100	375	2	263	98	4	263	276	8	0	4152.0		4152.0	73.8%			26.2%
尺度郷	50	225	8	27	57	2	267	168	5	120	2528.0		2528.0	74.6%			25.4%
荏草郷	50	149	4	236	41	1	356	108	2	240	1624.0		1624.0	72.4%			27.6%
(参考) 全給③・④合計	(300)	(993)	(4)	(244)	(214)	(3)	(148)	(779)	(1)	(96)	(11686.9)		(1168.9)	(78.4%)	3.3		(21.6%)
半給① 従二位藤原武智麻呂／大住郡仲嶋郷	50	216	7	342	27	4	222	189	3	120	2840.0	1420.0	1420.0	87.3%	4.3		12.7%
半給② 従三位山形女王／御浦郡走水郷	50	118	4	76	27	2	316	91	1	120	1367.0	683.5	683.5	77.0%	2.4		23.0%
半給③ 従三位鈴鹿王／高座郡土甘郷	50	178	6	353	110	4	65	68	2	288	1024.2	512.1	512.1	38.2%	3.6		61.8%
半給⑨(イ) 従三位？某人丁（葛城王？）／？	200?	Y（618町6段106歩～498町9段24歩）			Zイ（119町7段82歩～0）			498 9 24			7483.6 3741.8			3741.8	80.6～100%	2.5～3.1	0～19.4%
半給⑨(ロ) 従三位？某人丁（葛城王？）／？	200?	Y（618町6段106歩～498町9段72歩）			Zロ（119町7段34歩～0）			498 9 72			7483.8 3741.9			3741.9	80.6～100%	2.5～3.1	0～19.4%
半給⑧ 従三～従四位下某人丙／？	30?	W（198町1段178歩ないし226歩～78町4段144歩）			X（119町7段34歩ないし82歩～0）			78 4 144			1176.6 588.3			588.3	39.6～100%	2.6～6.6	0～60.4%
半給④ 従四位下櫛前女王／御浦郡水蛭郷	40	109	7	153	36	2	33	73	5	120	1103.0	551.5	551.5	67.0%	2.7		33.0%
半給⑤ 従四位下三嶋王／大住郡埼取郷	50	178	2	308	48	7	92	129	5	216	1943.4	971.7	971.7	72.7%	3.6		27.3%
半給⑥ 従四位下高田王／鎌倉郡鎌倉郷	30	135	0	109	29	8	109	105	2	0	1578.0	789.0	789.0	77.9%	4.5		22.1%
半給⑦(イ) 大官大寺／高座郡	100	345	9	301	224	0	133	121	9	168	1829.2	914.6	914.6	35.2%	3.5		64.8%
半給⑦(ロ) 大官大寺／高座郡	100	345	9	301	224	0	181	121	9	120	1829.0	914.5	914.5	35.2%	3.5		64.8%
(参考) 半給⑧・⑨合計（イ）	230	697	0	250	119	7	82	577	3	168	8660.2	4330.1	4330.1	82.8%	3.0		17.2%
半給⑧・⑨合計（ロ）	230	697	0	250	119	7	34	577	3	120	8660.4	4330.2	4330.2	82.8%	3.0		17.2%

註

(1)——『大日本古文書（正倉院編年文書）』1の635～640頁。なお、相模は奈良時代の諸史・資料（文書・木簡・墨書土器・調庸布銘・正倉院蔵伎楽面銘）に「相摸」なので、本稿も「相摸」を用いる。

(2)——西村正男「食封制度の一考察」（『歴史学研究』11-7, 1941年）。以下、西村氏の説はこれによる。

(3)——虎尾俊哉「相模国天平七年封戸租交易帳について」（『日本上古史研究』2-10, 1958年、後『班田収授法の研究』1961年に所収）。以下、虎尾氏の説はこれによる。

(4)——菊地康明「不三得七法について」（『書陵部紀要』10, 1958年）。

(5)——岡本勇『相模原市史』1, 1964年。

(6)——野々村安浩「神戸の田租」（『続日本紀研究』208, 1980年）。

(7)——竹内理三『神奈川県史 通史編』1（1981年）。以下、『神奈川県史』の説はこれによる。

(8)——中西康裕「古代封戸制の一考察」（『続日本紀研究』220, 1982年）、以下、中西氏の説はこれによる。

(9)——浅野充「相模国封戸租交易帳の復原と検討」（『神奈川県史研究』14, 1995年）、以下、浅野氏の説はこれによる。

(10)——荒井秀規『大磯町史』資料編1（1996年）。

(11)——『正倉院古文書影印集成』1（1988年）。以下の考察には、この『集成』の写真と筆者の勤務する藤沢市教育委員会作成の「交易帳」複製、及び国立歴史民俗博物館作成の「交易帳」複製を資料として用いた。なお、料紙の法量は『正倉院文書目録』（1987年）と若干の相違があるが大勢に影響はない。

(12)——『大日本古文書』1の638頁に鎌倉郡尺度郷の見輸租田数を「貳伯陸拾捌町」余とするが、「壹伯陸拾捌町」余の誤植である。この点、『寧樂遺文』では直されている。

(13)——「交易帳」の記載順序は、全給・半給の順となっており、大官寺の封戸はその記載位置からして半給である。この場合に、人封全給・人封半給・寺院封の順序であるとして、大官寺封戸を半給とする理解は成立しない。仮に大官寺封戸を全給として残る不明全給者の封戸の不輸租田を復原算出すると、マイナス数値を設定せざるを得ないからである。

(14)——『神奈川県史 資料編』1（1970年）。

(15)——注7『神奈川県史 通史編』1。

(16)——中西氏の復原は、『県史』にふれないが、同様

な復原結果を導いている。『県史』同様の復原の範囲内では、数値的な面においては『県史』の誤りを正したものになっているが、虎尾説の大官寺封戸の（イ）（ロ）2案を採用していない。中西氏が新たに復原した四天王寺（丁寺）封戸部の復原は、虎尾説（イ）（ロ）いずれかを採用することによって整数が算出、復原されるものであり、この部分を中西案はX・Yなどの変数を用いているが、この点はむしろ復原案の後退となってしまっている感がある。

(17)——論考の発行年次としては、注5『相模原市史』や注6野々村論考が『県史』に先立って、某人甲200戸、某人乙100戸と振り分けている。ただし、前者の復原は計算ミスがある。

(18)——「交易帳」の「相模国印」面数について、『県史』には70とするが誤り。『正倉院文書目録』、『正倉院古文書影印集成』、『日本古代印集成』（国立歴史民俗博物館、1996年）は76とする。ただし、D断簡右端の3面は僅存で写真版等では確認困難である。

(19)——a～d行にかかる3面の印面は、便宜的に同じものをトレースして載せ、界線は強調してある。また、c行の「陸拾参歩見輸租田貳伯柒拾陸町捌」は『大日本古文書』や『寧樂遺文』には採用されていないが、写真版に一部残画が確認されるので、文字の配置はそれに従ったが、a・b行のそれは推定である。

(20)——㊦で考察するような「交易帳」の本米の料紙一紙の紙幅の点からも、従来説は成立せず、一方、浅野説は次の通り想定が可能である。第9紙は左側に欠佚部はなく、横24.7センチで、界線間は1.85センチであるから、仮定した平均料紙幅との差から22.8センチ、12行が第9紙の右側欠佚部となる。この欠佚部の記載は、（う）（え）であり、某人甲と某人乙の合計封戸は300戸である。これは、最低でも6郷となるが、そのうち某人乙の鎌倉郡2郷は記載が残されているので、欠佚は残る最低4郷分の内訳、某人乙の鎌倉郡総記の残り3行、某人甲・某人乙それぞれの総記、そして某人甲と某人乙の鎌倉郡以外の封戸が1郡に複数あった場合にその郡ごとの総記が加わることになる。1郷の内訳、総記とも第8紙、第9紙は4行を当てているので、各々最低4行として、この欠佚部全体には少なくとも27行以上の記載がある。これは、おそらく、第9紙右欠佚部12行と第9紙と第8紙の間の一紙24行のうちの後半14行におさまり、残る前半10行と第8紙左欠佚部7行の計17行に舎人親王の余綾郡150戸総記部分の残り1行、150戸の内訳の3郷分の12行、

某郡50戸1郷分の4行が記載されていたのではなかろうか。その場合、料紙の紙幅との関係で、某人甲の封戸は異なる郡に150戸、某人乙は鎌倉郡100戸と他郡50戸の同じく150戸となろう。稿末の復原案参照。

(21) ——『万葉集』230～232番の題詞では霊龜元年9月没。

(22) ——延喜・民部式職封条によれば、「品位封者、薨年之料全納喪家」とあって、死亡年の品位封は遺族に収められる。

(23) ——明石一紀「相模国封戸租交易帳と収租定率法」(『神奈川県史研究』35, 1978年)。以下、明石氏の説はこれによる。

(24) ——浅野論考も指摘するように、聖武即位時に正一位大夫人となったのは光明子でなく宮子であり光明子は正三位であった点、光明子に封戸1,000戸が与えられたのは『続日本紀』に神亀4年である点、阿倍内親王は天平元年時点で皇太子になっておらず、それは天平10年である点の混乱がある。なお、同論考が安積親王を上げたのは、この史料とは別に、安積親王に別勅封戸を認めるとするものである。

(25) ——『復元 諸国天平正税帳』(1985年)の「越前国正税帳」解説(小池栄一氏)は、西村説を支持する。

(26) ——西村論考は、天平3年以前に相模にあった四天王寺封戸50戸(『新抄格勅符抄』)と天平6年3月に四天王寺に3年を限り施入された200戸(『続日本紀』)のうちに相模国設置のものを求めるものであるが、『県史』の飛鳥寺説は『新抄格勅符抄』に飛鳥寺の封戸が相模にないのは誤伝の可能性ありとするものである。この点は、西村説により蓋然性がある。筆者も前稿では西村説によったが、今回以下本文のように訂正したい。

(27) ——石上英一ほか(『正倉院文書調査』料紙の使用法による天平二年越前国正税帳の復原)(『東京大学史料編纂所報』18, 1983年)が、一つの公文書が同型同質の完形の一紙を料紙として貼り継いで成り立っている前提にたって、断簡に残存する行数から欠佚部の行数を推計し文書全体の行数・紙数によりその構成を推定する手段により、越前国正税帳の復原を試みている。なお、石上氏はこの方法で天平九年和泉監正税帳(『東京大学史料編纂所報』19, 1984年)、天平十年駿河国正税帳(『駿河国正税帳復原の基礎的研究』、『静岡県史研究』8, 1992年、後同氏『日本古代史科学』1997年所収)の復原も行い、また虎尾俊哉「正倉院文書三題」(『国立歴史民俗博物館研究報告』12, 1987年)が同様な手段から「天平十年周防国正税帳」の復原を行っている。虎尾氏の言葉によれば、「両断簡の間の欠佚部の行数を推定し、その結

果得られた行数とそこに盛らるべき記載内容の分量(字数)との間に整合性ありや」、なきやを判断する方法である。

(28) ——『正倉院古文書影印集成』のデーターにより、現存する正税帳・戸籍類を確認するに、同様に料紙の紙幅や界線間、行数にある程度均一性があると確認されるものは、天平二年大倭国正税帳、天平九年豊後国正税帳、大宝二年御野国加茂郡半布里戸籍、神亀三年山背国愛宕郡出雲郷雲下里計帳、天平十一年出雲国大税賑給歴名帳、その他かなりの例があげられる。そして、均一制が確認されない史料も、料紙一紙そのままの部分が残っていないだけであり、そこから逆に均一性がないとは言えないものなので、「交易帳」の料紙も均一性があったとしてよいであろう。なお、これらの多くがおのおの料紙一紙幅55～59センチで均一性があるのに対して、「交易帳」が想定47.5センチであるのはいささか気になるが、天平九年但馬国正税帳が45.5～47.6センチ、大宝二年豊前国仲津郡丁里戸籍の一部の44.7センチと48.0センチの例もあるから、「交易帳」の料紙はやや短めであったとしても不審はないであろう。また、もし、「交易帳」首部にあたる第6紙が本来あった見返しに掛かる端付き紙分1行程度右側に延び、想定した平均的料紙幅が長さ49.5センチ、縦界線間26行に延びたとしても、その場合には更にC断簡(第10紙)左側欠佚部とD断簡(第11紙)右側欠佚部の合計は長くなるので、その間に某人丙だけの封戸内容が記載されているのは尚更不自然となるから、本文の主旨に支障はない。【表1】で示したように「交易帳」の一紙は24～26行と想定されるので、稿末の復原私案の記載内容は各紙ごとに前後1行程度ずれることはあろうが、記載内容の復原には支障がない。なお別表参照。

(29) ——『寧楽遺文』は解説で「右大臣藤原朝臣」を不比等とするが誤解である。

(30) ——復原した欠佚料紙の合計行は41行であり、第9紙左端と第10紙右端の「相模国印」が完形であることから、この復原部分にも「相模国印」の列が完形で収まることとなる。その場合に、3行に1列だと過不足が生じるが、4行に1列の部分想定すれば不自然はないであろう。なお、この復原案では糊代部分を考慮していないが、糊代部分は0.25センチ程度が2カ所であるから、大勢に影響はなく、また裏文書の並びにも不都合は生じない。なお、浅野論考は、残存する「租壹仟壹伯柒拾陸束陸把」以下について、某人丙の全封戸ではなく、某人丙の封戸数が50戸以上である可能性をも示唆する。その場合には、某人丙の封戸は2郷以上となるが、3郷以上

別表 一紙の幅寸がわかる公文書（正倉院文書）

史料名	巻数	料紙	長さcm	行数	一行幅cm	史料名	巻数	料紙	長さcm	行数	一行幅cm
天平2年 大和国正税帳	正10	5	58.2	26	2.2	天平9年 但馬国正税帳	正29	2-3	45.5	19	2.4
	正10	9	56.5	24	2.4		正29	7	47.6	20	2.4
	正10	10	56.3	24	2.3		正29	8	45.9	18	2.6
	正10	11	56.1	24	2.3		(平均)		46.3	19	2.4
	正10	12	56.7	25	2.3	天平5年 出雲国計会帳	正30	2	57.7	26	2.2
	正10	13	56.5	24	2.4		正30	5	57.0	27	2.1
	正10	14	54.9	23	2.4		(平均)		57.4	27	2.2
	正10	15	57.3	24	2.4	天平11年 出雲国大税賑給歴名帳	正31	2	57.4	32	1.8
	(平均)		56.6	24	2.3		正31	6	57.2	33	1.7
神亀3年 山背国愛宕郡出雲郷雲下里計帳	正12	5	56.8	40	1.4		正32	3-4	57.3	33	1.7
	正12	6	56.3	38	1.5		正32	11	55.8	33	1.7
	正12	7	55.6	36	1.5		正32	12	54.2	31	1.7
	正12	8	57.0	36	1.6		正33	2	56.0	21	2.7
	正12	9	56.9	37	1.5		正33	3-4	55.6	29	1.9
	正12	10	57.0	35	1.6		(平均)		56.2	30	1.9
	(平均)		56.6	37	1.5	天平10年 周防国正税帳	正35	14	56.3	25	2.3
天平9年 和泉監正税帳	正13	5-6	56.3	28	2.0		正35	15	56.3	25	2.3
	正13	7-8	56.5	28	2.0		正35	16	56.4	25	2.3
	(平均)		56.4	28	2.0		正35	17	56.3	25	2.3
天平12年 遠江国浜名郡輪租帳	正16	6	58.1	32	1.8		正36	4	56.4	28	2.0
	正16	7	58.0	32	1.8		正36	5	56.6	27	2.1
	(平均)		58.1	32	1.8		(平均)		56.4	26	2.2
天平10年 駿河国正税帳	正17	8	55.7	25	2.2	天平9年 長門国正税帳	正36	10	57.1	26	2.2
	正18	3-4	55.4	26	2.1		正36	14	57.2	26	2.2
	(平均)		55.6	26	2.2		(平均)		57.2	26	2.2
天平7年 相模国封戸租交易帳	正19	6-7	47.5	25	2.0	天平2年 紀伊国正税帳	正37	2	51.6	21	2.5
養老5年 下総国葛飾郡大嶋郷戸籍	正20	2	55.7	45	1.2		正37	3	57.3	22	2.6
	正20	3	57.2	46	1.2		(平均)		54.5	22	2.5
	(平均)		56.5	46	1.2	大宝2年 筑前国嶋郡川辺里戸籍	正38	2	57.0	44	1.3
大宝2年 御野国味蜂間郡春部里戸籍	正22	2	59.0	26	2.3		正38	5	57.3	41	1.4
	正22	5	59.2	26	2.3		正38	6-7	57.3	41	1.4
	続4	2	58.6	27	2.2		正39	7	57.4	43	1.3
	続4	3	58.8	26	2.3		正39	8	57.1	43	1.3
	続4	4	58.7	27	2.2		(平均)		57.2	42	1.4
	(平均)		58.9	26	2.2	大宝2年 豊前国仲津郡丁里戸籍	正40	2	56.6	44	1.3
大宝2年 御野国加毛郡半布里戸籍	正24	2	58.5	26	2.3		正40	3	56.6	45	1.3
	正24	3	58.6	28	2.1		正40	6	44.7	35	1.3
	正24	4	58.9	28	2.1		正40	7	48.0	37	1.3
	正24	5	58.6	27	2.2		(平均)		51.5	40	1.3
	正24	8	58.4	28	2.1	天平9年 豊後国正税帳	正42	2-3	57.7	30	1.9
	続2	3	58.5	26	2.3		正42	4	57.9	29	2.0
	続2	2	58.6	27	2.2		正42	5	57.6	30	1.9
	続3	3	58.5	27	2.2		正42	6	56.7	30	1.9
	続3	4	58.7	27	2.2		正42	10-11	56.1	30	1.9
	続3	5	58.5	26	2.3		(平均)		57.2	30	1.9
	続3	6	58.0	26	2.2	天平8年 薩摩国正税帳	正43	6-7	55.6	29	2.0
	続3	7	58.4	27	2.2		正43	10-11	33.6	17	2.0
	続3	8	58.2	27	2.2		(平均)		44.6	23	2.0
	続3	9	58.5	27	2.2						
	(平均)		58.5	27	2.2						
天平2年 越前国正税帳	正27	4	57.4	26	2.2						
	正27	7	57.7	27	2.1						
	(平均)		57.6	27	2.2						

※数値は『正倉院古文書影印集成』による

☆正は正集。続は続集。6-7は、第6紙と第7紙で一紙を示す。

とした場合に、料紙に収まりようがなくなってしまう。
2郷とした場合は、料紙の面で、たとえば某人丙の封戸を80戸2郷、某人丁の封戸を150戸で同一郡内3郷として、第10紙と第11紙の間のもう一紙の9～13行目に某人丁の最終郷を、14～18行目に某人丙の総記が記載されることで可能ではある。しかし、その場合には、某人丙の田数の最高想定額198町1段178歩を80戸で割って得られる1戸毎の田数2.48町が「交易帳」全体の平均1戸毎田数3.20町とかけ離れる問題が生じる。この場合に、山形女王のそれが2.37町であるから例がなくもないが、198町1段178歩というその最高額は、某人丁の輸租率を100パーセントに設定した場合の数値であり、本来的にあり得ない数値である。試みに、それを実例のある輸租率の最高値である武智麻呂封戸の87.3パーセントで計算してみると、1.57町という小額になり、これは許容範囲を越えたものであろう。某人丙の封戸を90戸ないし100戸2郷とした場合にはなおさらである。某人丙の封戸は諸説のごとく、1郷の30～50戸と考えるのが妥当であろう。なお、この点については、D断簡(第11紙)冒頭に僅存するという「相模国印」が写真版等で確認されないのが惜まれる。その印面の位置が確定できれば、某人乙の封戸の考察に用いた方法で、「租壹仟壹佰柒拾陸束陸把」が某人丙の全封戸にかかるものか、部分にかかるものかは確定される。

(31)——『公卿補任』は、天平7年当時に藤原弟貞(山背王)を非参議で従三位とするが、『続日本紀』によると山背王は長屋王の変以後無位で、天平12年11月に無位より従四位下、奈良麻呂変後に従三位となり名を藤原弟貞に改めている。『続日本紀』をとるべきであろう。

(32)——菊地注4論考など、「交易帳」を「不三得七法」の適用例とする指摘は多いが、一国内の封戸の応輸租田の輸租率が7割以上であっても、国内の封戸・官戸全体のそれが7割以上であることは保証されない。国内の封戸と官戸のそれぞれの応輸租田額が約7割以上に設定されていたとするならばそれはあり得て、「交易帳」の輸租率は国内全体の「不三得七法」適用の一部ということ

になるが、その場合には、郡毎に封戸・官戸のそれぞれの応輸租田額が約7割以上となっている郡租帳を国衙で集計でもしない限り実務面で極めて困難である。明石氏は、郡毎に「不三得七法」が適用されている例として「遠江国浜名郡輸租帳」をあげるが、それは官戸・封戸を通じてのものであり、一方、封戸のみが書き上げられる「交易帳」では郡レベルで封戸に「不三得七法」適用の操作は行われてはいない。ならば、国衙レベルで、官戸・封戸それぞれの応輸租田の輸租率がまちまちな郡租帳を集約して、国内の官戸・封戸のそれぞれのそれを「不三得七法」適用に調整するはなはだ困難な事務作業を行ったと想定した場合のみ、「交易帳」は「不三得七法」の適用下ということになる。その場合には、「交易帳」の数値は、明石氏に反して、ほとんど国衙作成のものと言わざるを得なくなる。

(33)——「交易帳」と天武系皇族については、近時では、宮瀧交二「相模国高座郡と天武系皇族」(『綾瀬市史研究』創刊号、1994年)が『県史』説を補強し、一方、鳥養直樹「『相模国天平七年封戸租交易帳』からみた天平時代の相模国」(『寒川町史研究』9、1996年)は、「交易帳」と天武系皇族との関係を否定し、聖武系皇族と藤原氏との関係を主張する。宮瀧氏の論は「交易帳」のみに基づくものではないが、少なくとも「交易帳」から相模国と天武朝の密接な関係を説くことができないのは鳥養氏の批判の通りであろう。

(34)——1例だけ舎人親王の足上郡封戸の田数の「壹伯貳拾参町」の「貳拾」が書き直されている。この部分は、続く段歩と不輸租田の段歩にも書き直しがあるが、その段歩の書き直しは田数の町の拾の桁には連動しないものであるから、「貳拾」は単純な書き間違えを訂正したものとなる。

(35)——相模国は当時は中国(賦役令集解・古記説所収民部式。延喜・民部式では遠国)であるから、貢調使の期限は11月30日であるが、閏11月10日付けの「交易帳」が運調使(貢調使)に付されており、すでに違期が確定している。

(藤沢市教育委員会、国立歴史民俗博物館研究部プロジェクト研究調査員)

The Restoration and Studies of "the Books of Trading *Fuko-so* in *Sagami* Province" for the 7th Year of *Tempyō*

ARAI, Hideki

A large number of studies deal with "the Books of trading *fuko-so* (封戸租) in *Sagami* province" for the 7th year of *Tempyō* (A.D. 735), a list which shows ownership of rice fields and rice field tax when the rice field tax of *fuko* in *Sagami* Province was exchanged for a cloth and so on, in some observations, restoration of missing portions of the list have been attempted.

However, the conventional methods of restoration have estimated only missing portions of "the books" by calculating the numerical value of remainder, not observed the "*Sagami kokuin*" (相摸国印) and charge papers.

Now, the pictures of "the books" and detailed date of charge papers are made public, so that it is necessary to pay attention to where province seals were put, the size of charge papers and the rewriting marks on charge papers. By so doing the conventional restoration plan becomes possible to be confirmed or to be corrected, and a new restoration plan is able to present, also the owner of *fuko* who has not been identified can be assumed.

An analysis of rewritten marks decides a question that "the books" were prepared on the level of a provincial government office, not on the level of a county or an area. The numerals appearing on "the books" were determined by a provincial government office, and the autonomy of a county cannot be evaluated excessively from the numerals shown on "the books". Conversely, the control of *fuko* on the level of a provincial government office deserves attention.